大きな秘密、小さな秘密

永島園子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大きな秘密、小さな秘密

【Ｎコード】
Ｎ２１９７ＢＡ

【作者名】
永島園子

【あらすじ】
アンドレアス・ノイマンには、幼いころの記憶が無い。命の恩人で主のロベルトは賢王の誉れ高い人物だった。アンドレアスは主を心から尊敬し真心を込めて、日夜侍従としての職務に励んでいる。王の覚えもめでたく、貴族たちにも一目置かれる存在となったアンドレアスには……特別な秘密が有った。

侍従・１（前書き）

Ｒ１５は保険です。

侍従・1

贅を尽くした寄木細工の床に白大理石の柱、部屋の真ん中には巨大な四柱式ベッドが有り、そのわきには繊細な細工を施された猫足の机と椅子、部屋の隅の赤々と火が燃えている暖炉の前には高価な絨毯が敷かれ、その上に繻子張りの優美な寝椅子が置かれている。

若い小柄な侍従は暖炉の火を見つめながら、主のいない寝室で泣いていた。

真面目で仕事熱心であるから、仕えている王が不在でも王の許しなく椅子に座ったりベッドに腰掛けたりなど、決してしないのだ。侍従は王に仕えて五年になる。もともとは王の治める国の人間では無かった。九歳のころ飲まず食わずで戦場でさまよっていた所を、運よく王に拾われたのだ。侍従は命の恩人で主で、武芸や学問の師匠でもある「国王陛下」を心から尊敬していたし、感謝もしている。実際まだ青年といってよい年頃の国王は優れた政治家で、国一番の武人でもある。女性関係がかなり放埒でだらしない事を除けば、尊敬できる人物で、気前は良いし、思いやりも有る。実際、若い侍従は王を……ほとんど崇拝していると言っても良い。

「陛下、僕は……」

侍従は暖炉の火を見つめながら、知らず知らず大きな黒い瞳から、涙を流し、すすり上げていた。以前はこんな事は無かったのだが、この所、主がどこかの女性のもとに出かけて留守となると、ついこのように涙が出てきてしまうのだ。困った事に。

主の留守中、寝ずの番をしろなどと命じられている訳では無い。自室に下がって休めば良いのだが、主が無事に戻るまで心配で心配で、とても眠れないのだった。

かつてはどこに行くにも何をするにも、侍従は王の供をしたものだが、一昨年から愛人やなじみの娼婦の所を訪れる時は、供を命じられなくなったのだった。厳つい体つきの護衛三人は相変わらず供をするのに、自分だけ外された事が心外だったが、侍従という立場ではそのような事を主に向って言うべきではないし、実際、侍従はその件に関して何も王には言っていない。

こうした場合、通常は王は朝食の時刻まで宮殿に戻らない。だが、その日に限って何がどうなったのか侍従には分からなかったが、気が付くと暖炉の前の寝椅子に寝かされていたのだ。　泣き疲れて眠っていたらしい。大きなベッドには主が一人で眠っていた。耳を澄ますと健やかな寝息がかすかに聞こえる。それを聞くと侍従は心からホッとした。自分の体には王が微行の際に愛用しているコートが掛けてあった。恐らく王が掛けて下さったのだと、侍従は理解した。王が愛用している香水の香りがほのかに感じられる。この香りは、どこか深い森の奥の清らかな泉のほとりを侍従に思い起こさせる。深みがあって謎めいていて爽やかで胸の奥がざわめく、そんな魅力的な薫りを味わってから、主のコートを型崩れしないように丁寧に付属の衣裳部屋に収めておく。

先ずは自分自身の身支度を直さねばいけない。顔を洗い、髪をとかして黒いリボンで結ぶ。下着はすべて新しいものに着替える。下着は重要だ。ことにこの侍従のように秘密を持つ者には。

下着類はすべて白い。シャツも白いが、後は黒づくめだ。タイも上下の仕着せも靴下も靴も。侍従の目も髪も黒いので、それに合わせるようにと言う王の意向なのだ。ただ一つ、王が昨年与えた勲章だけが華やかな色合いを放っている。宮中に潜り込んでいたスパイ組織を摘発した功績によるものだ。それ以降、若い侍従は「黒の侍従」とか「黒い懐刀」とか言われて、権勢を誇る貴族たちにも一目置かれ、恐れられるようにもなった。王は貴族に任じるつもりだったが、自身の領地や召使の管理など役目を果たす上で鬱陶しいだけ

だと言うような事を言って固辞した。そして、これからもただ身近で仕えたいと強く願った。貴族の中には、真実それが侍従の願いであるのかについては疑う者も有ったが、王は若い侍従の願いを理解してくれた。
邸や領地を頂かない代わりに、宮殿で王の私室に最も近い部屋を賜った。そして若い大貴族の子弟の歳費に相当する年金を支給して下さっている。それで十分すぎるほどだと侍従は思っている。

王が目覚めたとあれば、他の者達にも呼び鈴を鳴らして知らせ、まずはうがいと洗顔の介助である。整髪と髭剃りは王専属の理髪師に任せる。衣装の着付けだが、下着の着替えは専属のメイド二人と三人がかりで素早く行う。襟付きのシルクのシャツを着せ、ズボンや靴下を穿かせ、クラバットを結び上衣を着せるのは侍従の役目だ。

「やはり、お前が結ばないと襟元が決まらないな」
「恐れ入ります」

毎朝、ほぼ同じ言葉を互いに繰り返しているが、王が自分のクラバットの結び方を気に入ってくださっていると言うのは、侍従に取って非常に重要な事なのだった。そして、その言葉を殆ど合図のようにして、理髪師とメイド二人は王の御前を退出する。入れ違いに朝食が運ばれてくるのだ。毒見も侍従の重要な役目であった。
まずは、王が食事の最初に飲む澄み切ったコンソメスープを一匙、王自身のスプーンですくって毒見用の小さなカップに入れてもらい、飲む。王自身のスプーンに毒を仕込む場合もありうるから、この手順は省けないのだ。

「これは美味そうだな」

王自身の手で、黄金色に輝くオムレツを真ん中から二つに切り、

ひとかけらを毒見用の銀食器に乗せる。侍従は恭しくいただき、咀嚼音その他のぶざまな音を立てないように万全の注意を払って優雅に美しく毒見をするのだ。これで王のナイフフォークにもオムレツにも毒が無い事がはっきりする。

「まことに結構でございます」

「そうか」

同様の手順でハムなどの加工食肉、魚の燻製もしくはマリネ、サラダ、果物と手順良く、毒見をする。　朝食の席で、王は侍従がどの様に食べ物を食べるかしばしばじっと見つめる。侍従の好物が何であるのか、自然と理解しているのは確実で、王が明らかに毒見の量よりも多目の量を取り分けてくれるのも、侍従の好物のオムレツと大好物の果物類は半分ほど侍従に食べさせるのも、王の心遣いのようだ。

朝食には菓子パン類も供されるのだが「気に入ったのなら、お前が食べろ」と言われる事も珍しくない。

食事中に飲む茶は、侍従が淹れる。無論、これも王のカップに注いだ上で、一匙だけ毒見する。

「毒見など面倒極まりないなあ。どうせならお前と一緒に食事をした方が、よほど気分が良いと思うのだが、それを口にすると老人どもがうるさいだろうか……」

王のお気持ちは有り難いが、恐れ多い。自分はただの侍従であるのだから。そのように若い侍従は感じている。

国王・1

「もっと、そのオムレツも食べよ」

そう命じると若い侍従は顔を一瞬赤らめて、それから静かにオムレツを口に運ぶ。桜色のくっきりした形の整った唇。薄っぺらでもなく、厚ぼったいわけでも無い。確かにこの唇は少女のものだ。普通の男子なら髭の一本や二本、痕跡が見当たりそうなものなのだが、ほのかにバラ色のさす白いきめ細やかな肌の上にはまるっきり見いだせない。やはり、この侍従は少女なのだ。改めてロベルトは気品がある愛らしい顔をまじまじと見る。もっと髪を伸ばして高く結い上げ、最新流行のドレスを着せたらどうだろうか？　ふとそんな想像をしてみる。おそらく……自分の愛人の誰よりも目を引く美しさであろうと、ロベルトは思う。

仮にこの侍従はアンドレアス・ノイマンと名乗らせてはいるが、本人が幼いころの記憶があいまいなため、本来の名は主人であるロベルトも知らない。

そもそもアンドレアスはロベルトがまだ王太子であった頃に、狩猟をしていて出くわした孤児だったのだ。幾日もろくに食べて居なかったようで、体中が針金のように痩せ細っていた。黒い瞳で見つめられて、見捨てる事など出来なかった。馬に乗せて宮殿に連れ帰ったのだが、恐ろしく体が軽かった。赤ん坊の死体を抱きかかえていたが、説得して土を掘り埋葬した。自分も飢え死に寸前というありさまだったのに、赤ん坊をずっと抱えて来たらしい。後で聞けば、どうやら内乱状態の神聖帝国から黒い大きな森を抜けて、王国側に出たらしかった。大人達は皆殺害され、住まいを焼かれたと言う。どの様な経緯が有ったのやら、事情は分からないが、ともかくも幼い子どもには過酷すぎる状況を生き延びたのは確かなように思われ

た。そのせいか記憶の一部があいまいになっており、自分の年齢が九歳だということは認識していたが、自分の名前はどうやら本当に思い出せない様子であった。亡くなった赤ん坊は妹というわけでは無いようだった。死の直前の赤ん坊の母親から、連れて逃げて欲しいと懇願されたと言うのだ。

「だんだん、この子の泣く声が小さくなって、もう聞こえなくなっちゃったんだ。どうしよう」

そう訴える子供の髪は自分自身で切ったそうで、牢屋に入れられた罪人のように非常に短かった。短かっただけでなく、所々地肌がまだらに透けて見えるお粗末さであった。着ている服は男の子のものであったし、「僕」と自称していたし、仕草や言葉から、てっきり少年に違いないと思ってアンドレアスという名を与え、本人の希望もあって身近に置く事にしたのだ。

以来アンドレアスは行儀作法も武芸も学問も懸命に学び、仕事ぶりも熱心で手際も良い、なかなかに優秀な侍従となったが、思わぬ事で少女であったことが判明した。

アンドレアスが十歳の年に、ロベルトは即位して国王となった。愛らしい侍従は懸命に務め、十二歳になるころには名実ともに王の側仕えにふさわしい人材に育ちあがっていた。それが……アンドレアスが十四歳を過ぎた頃であったか……真っ青な顔をして腹を抱え、ズボンにかなりの血が滲んでいる状態で寝椅子で転寝しているという状態にロベルトは遭遇してしまったのだった。急ぎ乳母のノイマン夫人に、医師を手配させた。

「この方はれっきとした女性で、初潮を迎えられたのです。病では御座いません」

その医師の報告を聞いて、ロベルトは自分のうかつさに舌打ちし

たい気分になったものだ。乳母のノイマン夫人はどうやらかなり以前から、小さな侍従の秘密に気付いていたという。引き取って以来アンドレアスの教育係で、親代わりでもあり、今では本当にアンドレアスの養母でもある関係なので、当然と言えば当然であったかもしれない。

「陛下は御存知なのだとばかり思っておりました」

そのように言ったノイマン夫人とは口裏を合わせ、ロベルトは侍従が実は女である事を今も知らないふりをし続けているのだ。

そのノイマン夫人は白髪になっても美しく優雅で忠実無比だが、無口で人の好き嫌いがはっきりしており、なかなかに気難しい。だが小さな侍従の事は最初から可愛がっており、何くれとなく面倒を見てやっていたようなのだ。ノイマン夫人は戦争未亡人で実子も病で亡くし、天涯孤独の身の上であったから、アンドレアスの正式な侍従就任に合わせ、ロベルトの「お声がかり」で養子縁組をさせたのだった。従って、今ではアンドレアスはノイマン夫人を「母上」と呼んでいる。

ノイマン夫人の協力も有って、アンドレアスは男として貴族たちに認識されているのは間違いないようだ。熱心に学び、武芸の研鑽も怠らない。理路整然とした話しぶりも、颯爽とした身のこなしも、上流の青年のそれであって、女性には確かに見えないだろうとロベルトは思っている。女官達はアンドレアスを前途有望な美しい青年と見ているようで、時折付文を渡されているようだ。

「先ほどなかなかに愛らしい女官見習いから、文を貰っていたようだが、どうする？」

面白半分にロベルトが問うと、アンドレアスは顔を赤らめ、生真

面目な調子でこう答えるのだ。

「僕は国王陛下に命を救って頂き、取り立てて頂きました。今はまだ十分に御恩返しも出来ていませんから、女性と付き合うなどと言う気分にもなりませんし、その時間もございません」

なかなかに負けん気も強く、四、五歳年かさの青年たちを相手に、剣でも馬術でも学問でも政策論争でも、一歩も引かない見事な戦いぶりだ。まったく化粧気のない顔は凛々しい。それでも本当の男とは異なり、顔の輪郭も繊細で優しげだ。女にしては背が高いので、少し小柄な男にも見える……はずだが、一旦実は少女だと知ってしまうと、ロベルトの目にはどうしても男には見えなくなってしまっている。

食事をする時も、つい、年若い女なのだと言う意識が働く。だが、愛人とかなじみの娼婦のような相手とは勝手が違う。ロベルトには妹はいないが、いたらこのような感じであったのかもしれないなどと思う。

「育ち盛りなのだからな、もっとちゃんと食べるのだ」

食事の際も、ついそのような事を口走ってしまう。だが、どうなのだろう。胸元は特殊な下着で押さえ込んでいるらしいが、これからますます女らしい丸みを帯びた体が出来上がっていくはずなのだ。不自然な現在の状況をいつまでも続けさせて良いものかどうか、悩むところだ。このまま「アンドレアス・ノイマン」が成長するのを見たい気持ちが有る一方で、女として装わせた姿を見てみたい……とも思う。

だが、それにしても、この侍従の本来の名前は何であったのか？

気品有る優美な面差しは、とても名も無い庶民の血筋とは思えない。そういえば、養母となったノイマン夫人の面差しとどこか似通

ったものを感じるが、本当の所、二人は赤の他人なのだろうか？
ロベルトが幼い時分に聞いたノイマン夫人の身の上話では、ノイマン夫人自身も王国の生まれではなく、黒い森の向こうの今は滅んだ神聖帝国の「ちょっとややこしい家」の娘だと言っていたことが有る。どうややこしいのかについて、その後尋ねた事は無いが、一度きちんと話を聞いておくべきなのかもしれないと、ロベルトは思うのだった。

国王・1（後書き）

誤字、見つけ次第訂正していますが……御指摘大歓迎です

ノイマン夫人・1

青年国王ロベルトの乳母であるノイマン夫人は、名をセシリアと言い、王国の貴族では無い。だが、貴族に準じた扱いを受け、王宮内では誰にも一目置かれる存在だ。戦死したノイマン夫人の夫は先代国王の信任厚い軍人であった。それも並みの軍人ではなく諜報工作の責任者であったらしい。

ロベルトが身体壮健・眉目秀麗な青年であるだけでなく、善政を敷き、一度は傾いた王国の財政を立て直すような優れた国王となったのは、生まれついての素質以上にノイマン夫人の厳しくも献身的な養育によるところが大きいと広く認識されているのだ。

ロベルトは生まれながらの王太子であったが、生母の王妃は産後の肥立ちが悪く、ロベルトが初めての誕生日を迎える前に亡くなった。その、母親との縁が薄い跡取り息子の養育を、若い戦争未亡人で一人息子を亡くしたばかりのノイマン夫人に委ねたのは、先代の国王だった。

「亡き息子が生きていたならばどう育てたか、そして将来王になる子供には何が必要か、常に意識して育ててほしい」

その先代国王の言葉は、ノイマン夫人の養育方針を決定づけた。母を失った赤子と息子を失った女は、たがいに寄り添うようにして、瞬く間に強いきずなを結んだ。幾度か幼いロベルトは病に見舞われることが有ったが、ノイマン夫人の献身的な介護でいつも無事に乗り越える事が出来た。少なくとも先代国王はそのように語っていたし、人々もそれを認めていた。だが、ノイマン夫人としては「当たり前の事」をしただけだと思っていたので、先代国王の言葉はいささか面はゆいのだった。

ロベルトが一歳を過ぎる頃から、ノイマン夫人は砂遊びをさせたのだが、砂は清潔なものを吟味し、庭師の手で丁寧にふるいにかけ、異物の混入が無い事を確認していた。最初の頃は自分で掘り返すより、庭師たちがあらかじめ作った山を突き崩す事にロベルトは夢中になっていた。二歳になって型抜き遊びをする頃になると、貴族や軍人・学者・豪商の家庭で同じ年か、少し年上の兄弟姉妹がいる健康で性格の穏やかな幼児をノイマン夫人が五人選び、一緒に砂遊びをさせた。幼い子供同士揉めると、ノイマン夫人は如何なる場合も相手の子供に謝らせたが、そうした場合は必ず「ロベルト様が王太子でいらっしゃるから、御身分に遠慮させたのです」と言い、砂遊びは中断させて子供たちを帰宅させるのだった。ロベルトは厳しく叱責される訳ではなかったが、自分のわがままで遊び相手が気分を害すると、楽しい遊びも止めになってしまうという事を幾度も体験して、四歳になる頃にはごく自然に遊び仲間に気配りが出来る子供になった。

仲良く遊んでいれば、ノイマン夫人が口をさしはさむ事はほとんど無く、ロベルトの自由にさせた。だが、遊んでいるロベルトの側で編み物や刺繍をしながら、常に目配りは怠らなかった。

砂遊びがしにくい晩秋から冬に掛けては、室内の床に白い大きな布を広げ、好きなように絵や模様を書くと言う遊びをした。やがてその布に陣地や道を書き、その上におもちゃの兵隊を置いたりして遊んだりもするようになった。あるいは紙芝居や絵本の類をノイマン夫人が読む、という事も有った。

ロベルトを含めた六人で、ほぼ毎日のように一緒におやつを食べたが、その際も「仲良く楽しく食べるにはどうすれば良いのか」をロベルトにノイマン夫人は考えさせたのだった。仲良しの子供の好みや、皆が楽しめる趣向について考える事が、マナーや社交術の基礎となった。

五人の子供たちはやがて、ロベルトの学友となり、有能な廷臣となって、今やこの国を支える人材に育っている。その五人が五人ともノイマン夫人には頭が上がらないのだから、宮廷における夫人の立場が強固になって行くのは、自然な流れなのだった。

だが、どれほど権勢を握ろうとも、ノイマン夫人は昔と変わらず黒一色の飾りの無いドレスを纏い、亡き夫に贈られた指輪以外の装身具は身に着けない状態を保っている。王となったロベルトは長年の功績に対して、爵位と領地を与えようとしたが、それを固辞した。そのかわり可能な限り宮中に伺候し続ける事と、優れた軍人であった亡き夫の最期の地に、顕彰碑の建立を願ったのだった。

ロベルト国王は忠実なノイマン夫人の願いを受け入れ、他に終生の年金の支給と、身寄りのいないアンドレアスを養子に迎えさせる事を決めた。

「アンドレアスという名前は男の名だけれど、お前は女の子よね。本当の名前は何というのかしら？」

国境近くでロベルトが拾った戦災孤児らしい子供は、身なりは男の子だったが、実は少女だった。ノイマン夫人は風呂の世話をしてやったし、着替えの手伝いもしてやったから、アンドレアスが秘密だと考えている事は、夫人にとっては秘密でも何でも無いのだった。

「いくら考えても思い出せません。アン……何とかだろうとは、思うのですが、その名前を呼んだはずの両親の記憶がはっきりしないのです」

ロベルトが連れて来た最初の日のアンドレアスの髪型は、ところどころムラになって地肌が透けて見えるようなひどいものだった。更には左のこめかみから後頭部にかけて比較的新しい傷が有った。どうやらその傷は自然に塞がっていたようだったが、自分の名前を

覚えていないのが本当だとすると、怪我はかなりひどいものであったのだろう。もしかしてこの少女は、何かの事件なり事故なりに巻き込まれた被害者なのかもしれないとノイマン夫人は考えている。

というのも、ノイマン夫人自身が複雑な出生の秘密とやらを抱え込んでいたようで、幾度か理不尽にも殺されかけたのだ。それを避けるには他国に逃亡するしかないと悟り、親切な猟師の老人の手引きで王国側にやってきたのだ。薬草取りの老婆の小屋で厄介になっていた所、負傷したマウリッツ・ノイマンを救った事が機縁となり、帝国からの密入国者であったセシリアは軍人の妻となり、晴れてセレイア王国の国民となったのだった。

五年余りの結婚生活は幸せであったし、夫と息子を亡くした後は一心に世継の王子の乳母として務めていたので、生まれた土地のことなど考えたことも無かったのだが……自分とどこか面差しの似たアンドレアスを引き取って以降、ノイマン夫人は自分自身の遭遇した理不尽な災厄について、あらためて考える事が多くなった。

亡き夫マウリッツは、セシリアは生国である神聖帝国の皇族だった可能性が高いのではないかと推理していた。神聖帝国は歴史ばかりがやたら長かったが、セシリアの生まれた頃には建国当時の勢いはとうの昔に無く、領土も十分の一以下になってしまっていた。統治者は皇帝と呼ばれていたが、実態は小国の王と言って良い。だが他国の王家よりうんと家柄が古く、由緒正しいという事を大いに誇っていた。「いた」というのは、セシリアがマウリッツ・ノイマンと結婚して以降になるが、深刻な帝位継承をめぐる争いが起き、その結果近隣の諸国の介入を招き、内乱がおきて、結局は国が滅んでしまったのだ。

夫は戦死する寸前まで帝国の皇族の行方について調査していたようだ。どうやら先王の指示であったらしい。夫が亡くなり生まれた国が滅び、調査を命じた先王も亡くなられた。その詳細な報告書は夫の生前のままの状態の書斎にしまってあるが、セシリア自身が目

を通したことは一度も無い。

侍従・2

若い侍従が敬愛する国王陛下は独身男性である。それも思い切り魅力的な……

皇帝の位を巡る争いが引き金となって、隣国であった神聖帝国は長い内乱状態に入り自滅した。侍従にとって亡んだ神聖帝国は生まれ故郷のようだが、幼いころの記憶を失っている所為か特に何も思う事は無い。それでもこのセレイア王国に逃げてきた自分とも多少なりとも縁がつながっているのかもしれない旧帝国の人々が、この国で受け入れられているのは、侍従にとっても嬉しい事だった。

「帝国の農奴制は良くなかった。あれだけでも国が亡ぶのに十分な理由になる」

そんな王の言葉を深く理解できたわけでは無いが、真面目に働く農民は正当に評価されるべきだし、きちんと一人前の国民として扱うべきだと言う王の考えは、文句無しに正しいと若い侍従には思われた。

神聖帝国が滅んで、その国土は隣接する四つの国家に分断され吸収された形だが、一番広い面積を取りこんだのはロベルトが治めるセレイア王国だ。亡き先王もロベルトも隣国である神聖帝国の皇室のお家騒動に関わるのを意識的に避けてきたが、神聖帝国内の二つの勢力が争って自滅して以降は国境線に軍を張りつかせ、流入してくる避難民を保護した。するとごく自然に領土が転がり込んで来たのだ。他の三つの国はセレイア王国よりはるかに国土も狭く、国民も少なく、したがって軍事力も小さい。ましてや神聖帝国の深刻な内紛を知って以来、ロベルトは避難民の流入に備えていたので、当然の帰結と言えなくもないのだった。

そうした先を見通し、慎重に確実に計画を実行する力も、ロベルトが「名君」とされる理由の一つなのだろう。若い侍従は、かつての帝国の農奴であった人々が、希望を持って働き、その子供たちが学校に通って熱心に読み書きを習う様子を見て、非常に感動していた。ロベルトはしばしば若い侍従を伴い、忍びで日帰り可能な範囲で各地へ視察に出ていたので、そうした様子も直接見聞きできたのだった。そうした視察の折は、主とゆっくり馬を並べて行く事が許される。若い侍従には非常に幸せな時間だ。

「僕は陛下のお傍にお仕え出来て、本当に幸せです」
「そうかそうか」
「本当です」
「別に嘘だなどと、思っていない。だが、お前が褒めるほど自分が立派な王だとは思えないな」

陛下は御自分に厳しいのだ。だからこそ、この方は名君でいらっしゃるのだ……そう侍従は受け止めた。都に入り、夕日を背に受けて王宮の秘密の門にたどり着くまでが、ほぼ二人で過ごせる時間だ。もっとも、隠密に王を警護するものは要所要所に配置されているはずなのだ。

「神聖帝国が失われたという事は、東方の国々にも伝わっているだろう。歴史が古いだけに帝国は、遠い国々にもその名を知られていたからなあ……」
馬にのんびり揺られながらも、王が難しい顔をなさっているのが気になる侍従だった。
「何か御心にかかる事が、御座いますか？」
「……我が国が剥き出しの形になってしまったのだ。緩衝地帯を失ってしまったと言うべきか」
「ムジーブ大君主国の事でしょうか？」

「ああ、そうだ」

ムジーブ大君主国ははるか東方の砂漠地帯に起こった国で、その荒々しく強くすばしこい騎馬軍団は各国の恐怖の的だった。実際、近隣諸国に積極的に戦いを仕掛け、ここ百年かそこらの内に国土を大いに広げていた。今やその西の端は、河一つを挟んで旧帝国の地域と境を接するまでになっている。言語習俗がセレイアを中心とした西大陸の国々とは大きく異っており、こちらの常識はあちらの非常識と言う具合で、非常に付き合いにくい相手なのであった。

「攻め込んでくるでしょうか？」

「万事、大君主の一言だけですべてが決まると言う国がらしいからなあ……旧帝国が行っていたと言う奴隷の貢納などという事をする気は全く無いが、機嫌をむやみに損ねるのも賢くないだろう」

セレイア王国では奴隷制度が廃止されて久しいが、旧帝国では皇族・貴族以外は国民の大半が奴隷状態に置かれていた。ムジーブ大君主国には様々な地域から奴隷が運び込まれ、活発に取引されているという噂は、このセレイアにも届いている。旧帝国は軍事大国であるムジーブを恐れ、定期的に奴隷を貢納すると言う屈辱的な条件も受け入れて機嫌を取り結んでいたようだ。大君主国のハレムでは白い肌で容姿の整った女奴隷が多数、必要とされているらしい。

これまでセレイアと大君主国との間に正式の外交関係は存在しなかった。国境を接していなかったから、互いに必要を感じなかったというのが正しいだろうか……と、侍従は理解している。

「近頃、大君主は非常に不機嫌なのだそうだ」

ロベルトはそう言うと、ため息をついた。セレイアの諜報網はそれなりに優秀であるとは侍従も理解していたが、遠い大君主国の主の機嫌まで承知しているとは、さすがに驚きだった。

「なぜでしょうか？」
「大君主のハレムには寵を受けた女が五十人以上いるらしいが、一番気に入りの女が生んだ娘が行方不明なのだそうだ。どうやらさらわれたらしい」
「大君主は様々な国を滅ぼしたようですから、恨む者は数知れないでしょうね」
「それはそうなのだが……その娘が西大陸のどこかに売り飛ばされたと言う情報が有るようだ。困った事に、大君主はその情報をかなり真剣に信じ始めているらしい」
「近頃熱心に大君主国の言葉を学んでおいでなのは、その事と関わりが？」
「外交交渉で避けられる戦争は避けたいからな」

正式に対等な外交関係を結びたいとロベルトは考えているようだ。

「隣同士になりましたから、どうぞよろしく……ではなあ、どうもきっかけとしては弱い。だが、挨拶一つしない内に、互いに不信感を募らせ、緊張関係になるのは非常にまずい」
「仮にその姫が西大陸のどこかにさらわれたとして、探し出して大君主のもとに送り届けたら、大いに感謝されるのではありますまいか？」
「おお、そうだな。それが良い手だな」
「ですがその姫が見つからなかったり、あるいは殺害されていたりしたら……」
「そうよなあ……まだ、戦争は避けたい。新型の銃の配備には、当分時間がかかるし、改良型の大砲もまだ実用段階とは言い難い。現状では投石器と威力は大差ない、いや、あれでは投石機の方がマシかもしれん」
「では……名馬をお贈りになっては？」
「ほう、それは名案だな。何しろ……」

王は何かを話しかけて、急に黙った。それが何なのか、なぜなのか、まだ若い侍従には読み取れない。だが、尊敬する王が自分の案を検討に値すると思って下さったようだと言うだけで、十分に幸せなのだった。

国王・2

近頃、ロベルトは気が付くと若い侍従の顔を見詰めている事がある。美しい異性の顔に魅かれるのは、当然と言えば当然なのだが、愛人たちの中には人並み優れた容姿の者もいるし、売れっ子の高級娼婦は若い貴族や豪商たちに崇拝されるほど優雅で美しかったりする。

侍従の美しさは未完成でみずみずしく繊細で、ベッドを共にする女たちの華やかさ、あるいはある種の逞しさとは無縁だ。

今日はこうして侍従を連れて、都に一番近い開拓地を真面目に視察したが、昨夜は愛人の一人と強かに飲み、大いにベッドで乱れたのだった。女は貧しい漁師の娘で「魚臭い田舎で埋もれるには、あまりにもったいない」自身の美貌で成り上がってやると決意して都にやってきて娼婦の見習いとなり、それからロベルトの目に留まって愛人となった。馬鹿正直で、気が良い所が有り、一流どころの娼婦になってやっていくには、芸事も学問も大いに修練が不足している。そんな女だ。

「あたしは宝石が大好き」

「よしよし、正直な奴だな。ならばこれはどうだ」

機嫌を取り結ぶために、昨夜は大粒のダイヤを連ねた首飾りをやったのだった。

「まあああ、でっかいダイヤがいっぱい！　ありがとう、陛下！大好き！」

体中で喜びを表し、大きな音を立ててロベルトにキスをした。恐らくノイマン夫人なら眉を顰め、門閥貴族たちなら呆れかえる様な粗野な言葉遣いだが、陽気で嘘が無い。贈り物をやると、現金な程反応が違い、殊に金額の張る品を受け取った時にはロベルトの望む

ままに淫らに奔放に乱れまくる。彼女にとって、こうした振る舞いもある種の仕事なのだとロベルトは思っている。

「お前は本当に良い体をしている」

「陛下は色男だし体もすごいから、あたし、お役御免になったらこの世界でやって行けるかなあ」

「まだ稼ぐのか。あれだけ色々やっただろう。田舎で商売でもやったらどうだ」

「そっか！　そうね！　そうしよう」

こんな会話も交わした事が有る。互いに仮初の縁だと認識しているのだ。それでも、もし子供が出来た場合の事を考えて、相手が娼婦の場合は年単位で買い占める格好を取っている。避妊法は色々あっても、どれも確実ではないからだ。もし子ができればロベルトが引き取り、将来は貴族に列する事になる。庶子が王位を継げないのは、この国の建国以来の祖法だから、それも申し合わせの内だ。

ロベルト自身で色々考えてみた所、愛人やなじみの娼婦は皆、正直者というのが共通した特徴であるような気がする。ロベルトは国王と言う立場上、見え透いたお追従やら本音とはまるで違う「社交辞令」と言う奴を見聞きする機会も多い。それだけにベッドの中では正直な言葉しか聞きたくない。そんな気分の表れなのだろう……と、自分では思う。

このセレイア王国では奴隷制を廃して久しいが、人身売買が全く存在しない訳では無い。近頃は法の取り締まりが厳しくなっており、娼婦も自分の意志でなる者が増えたが「親兄弟の借金のカタに売り飛ばされて」という者がいなくなったわけでは無い。それでも職場が国内の、国が認めた地域の娼館なら、べらぼうな金額の借金を背負わせる事は無いし、衣食住や衛生に関する決まりもおおむね守られている。

問題は外国相手の場合だ。ロベルトは実際に現場を見た事が無いが、より高額の資金を得るために大君主国に娘を売り飛ばす者もいるらしい。

「肌が白くて滑らかで健康で、まだ男を知らない若い子が良いんですって。向こうで宦官が教育係になって、あちら式の行儀作法やら楽器の演奏やら踊りやら仕込むらしいの」

そんな話を教えてくれた娼婦もいた。器量の良い少女一人当たりに大君主国側の奴隷商人が払うのは、あちらの金貨で千枚が相場らしい。大君主国の金貨は純度が高く、正式の外交関係が無いこのセレイア王国でも十分通用する。買い取られた少女たちは二年ほどの教育期間を経て、ハレムにおさめられる。その際に大君主のハレムを監督する宦官長が奴隷商人に支払う金額は、一人当たり平均で金貨五千枚ほどになるそうだ。

「差引き四千枚分の取り分か。幾ら手間暇かけたとは言え、一人当たりの経費は二年で金貨五十枚もいかないだろう。奴隷商人は儲かると聞くが、なるほど凄いものだな」

「でもね、女の子を売った家族に行く金貨はせいぜい百枚かそこらよ。中には十枚でごまかされちゃったなんて事もあるみたい」

仲介役の娼館もかなりぼろもうけをしているのだ。奴隷の売買は当人同士が納得していても違法行為で、ロベルトも厳しく取り締まらせている。そこで近頃は法による処罰の対象となるセレイア王国籍の少女は避け、まだ国籍を得ていない避難民や、他国の少女がもっぱら売買されているらしい。

「他国の少女なら、黙認なさるべきでは？」

そんな事を言った外交官もいる。大君主国のハレムでは白い肌の美少女は必要不可欠な存在で、その供給をあまりに厳しく取り締ま

るとロベルトが憎まれるから危険だと言うのだ。何と歴代の大君主は、そうした白い肌の奴隷の腹から生まれており、見た目はこの西の大陸の貴族と変わらないのだと言う。これまでの大君主たちは生母と同じ生国の女を好む傾向にあり、その意味でも迂闊に手を出せば感情的に恨まれる恐れが強いらしい。

「ムジーブ大君主国は独自の暗殺専門部隊を養成しております。こう申しては何ですが、娼婦や身分低い女と王宮の外でお会いになるのは危険だと感じます」

そう、苦言を呈した情報将校も居た。

奴隷商人に暗殺専門部隊……知れば知るほど恐ろしい相手だ。その恐ろしい国家の最高権力者を怒らせた者は誰なのか？　行方不明だと言う大君主の姫が、侍従の言うように既に殺害されていたら、実に厄介だ。だが……確かに、名馬を贈るのは悪くないかもしれない。

「ほう、それは名案だな。何しろ……」

何しろ、男を知らない肌の白い美少女の値段は金貨五千枚なのに対して、戦場をものともせず疾駆する駿馬は金貨一万枚するらしいから……と言いかけて、無垢な侍従の笑顔を目にした途端、言葉が止まった。何やら汚らわしい嫌な話で、この侍従に聞かせるにはふさわしくない。つい、そう思ってしまったのだった。そして昨夜の自分の行動を気恥ずかしくも感じたのだった。そのような事を感じたのは、全くの初めてであったので、ロベルトは自分で戸惑ってしまった。

自分は穢れきった大人で、この無垢で清らかな侍従に信頼され尊敬されるにふさわしい男ではないのだ。そこまで考えてから、そのような事を考えた自分自身に対して驚いた。

「もうすぐ都ですね。お帰りになったら、お茶になさいますか？それともお夕食に？」
「まずは、茶を飲もうか」
「その後、お出かけですか？」
愛人の所で寝るときは、夕食を取らずに出かけるのが常だった。
「いや、ゆっくり夕食を食べて、風呂に入って大人しく寝よう」
「はい」

侍従は、明らかに嬉しそうだ。考えてみればこの所、一緒に夕食を食べていなかった。これほどに喜んでくれるなら、もっと一緒に食事をしよう。そんな風に思わせるには十分な愛らしい笑顔だ。

「献立は何だろうな」
「はい。料理長自慢の季節の野菜のポタージュと牡蠣のグラタンで初めまして、メインの魚は鱒で白ワイン風味のクリームソースで……」

延々と細かい説明がつく。鱒の後はロベルトの大好物の鴨のローストのようだ。侍従は名人堅気の気難しい料理長に気に入られている。このアンドレアスの前任者が毒見をやっていたころは、料理長がしょっちゅう怒声を発していたらしいのだが、今は当時の事が嘘のように穏やかなのだ。若い侍従はロベルトの好みの料理を、最高の状態で食べさせる事で頭が一杯らしい。その表情を見ているだけで、ロベルトは幸せな気分になれるのだった。

ノイマン夫人・2

「母上、今夜は陛下が久しぶりに王宮内でお夕食を召し上がります。ですから今夜は申し訳ありませんが」
「ああ、良いのよ。お役目第一ですからね。私はネリーと昔話でもしながら、のんびり食べますよ」

アンドレアスは実に嬉しそうだ。
ノイマン夫人から見て、アンドレアスの王に向ける気持ちが歳月と共に異性に対する思慕の色合いを強めてきているのは明らかだったが、男として扱われ、王宮と言う特殊な世界で生活してきただけに、本人に自覚が殆ど無いように感じられる。アンドレアスが少女であると知りつつ、このような形で身近に置き続けている王の気持ちも考えもはっきりしない今、何もそのあたりについては触れない方が良いのだと、ノイマン夫人は考えている。恐らく、王自身色々と迷っているのだろうから。
それとなくアンドレアスの幼い頃の事を聞き出し、ノイマン夫人自身の常に危険にさらされていた帝国での日々を重ねあわせて考えてみた所で、一つの推論が導き出されていた。
まずは王の言うように自分とアンドレアスの面差しが似通っているとして、互いが血縁かも知れないと考えた。次いでアンドレアスという名は、本人が微かに記憶していた自分の名前が「アンではじまり、スで終わった」と記憶していたのでつけられたという点を考えてみた。三番目に、あの、黒い森に出やすい地域に住んでいた、もしくは養育されたという事、そして、最後は……

「この白いシャツの刺繍がねえ……」

アンドレアスが発見された時、身に着けていた膝丈ズボンと白い

シャツは、汚れきりところどころ破れていたが、貧しい農奴や猟師、炭焼きといった家の子が身に着けるにしては上等な品だった。それなりに豊かな家で育てられたのかもしれない。いずれにしてもあの服を用意した家の実子では無く「育てられた」のは確実だ。シャツの右の裾の裏に刺繍された小指の頭ほどの丸い印が意味するものは、明らかだと思われる。ズボンも汚れていた時は黒か濃い灰色かに見えたが、洗い上げてみると暗紫色だった。この色も特別な色だ。

特殊な刺繍とズボンの色についてもう、何年も気になっていたが、亡き夫の書斎で、つい最近一枚の表を見つけて、残された報告書を王に渡すべき時期が来たのだと感じた。

昔からずっと仕えてくれているメイドのネリーと一緒に、具だくさんのスープと牛肉のソテーにサラダと言う簡素ではあるが、滋養に富んだ食事を終えると、亡き夫の書斎に保存してあったあの、帝国の皇族に関する分厚い調査報告書とアンドレアスが発見された時に着用していた服を抱えて、ロベルトに面会を申し入れた。王とアンドレアスもちょうど食事が終わった所であった。

「どうぞ人払いをお願いいたします」
「アンドレアスもか？」
「はい」

それを聞いて、ロベルト王は意外だと言う表情をした。アンドレアスは一瞬不満そうな表情を浮かべたが、静かに部屋を出て行った。

「あれにも内緒とは、一体何なのだ？　セシリア」
「この服を御記憶かと存じますが……」
「あれの着ていた服だな」
「はい。この右の前裾の裏側をご覧ください」
「ほう。なかなか凝った刺繍だな。金糸が使われているようだが、

なぜ、わざわざ裏の目立たぬ場所に……」
「これは神聖帝国では『忌み子の印』と呼ばれたものです。そして、このズボンですが一種の禁色でして特別な意味が有ります。少なくとも、農奴の子では絶対に着用を許されないものです」
「何やら込み入った事情が有りそうだが、何かわかったのか」
「あくまで私の考えですが……」

忌み子、つまり望まれずに生まれた子を意味する言葉だが、神聖帝国では一般に男女の双生児は忌み子であった。そうした双子を皇族や貴族の正妻が産んだ場合、男子は育てられ、女子は家臣に預けられた。そうした女子はどこかの邸内でずっと監禁状態で養育するか、どうしても外に出す場合は男の姿をさせなければいけないとされた。

「私自身は田舎の貴族の邸の中で閉じ込められる様にして育てられましたが、着る服の裏にはすべて、この忌み子の印が縫い付けられておりました。その印を密かに纏う事で、世に出た方の男子が無事に育つと信じられていたのです」
「セシリアは高貴な血筋だと亡き父上がおっしゃっていたが、ならば皇族であった訳か？」
「皇族か貴族かは存じません。私の服の印はすべて銀糸でした。ですが、これは金糸です」
「その違いは、何だ？」
「亡き夫の書斎を整理しておりまして、つい最近見つけましたこの表によりますと、忌み子の印には五種類あるそうです。御覧下さい」
マウリッツは五種類の印の絵を描き、それぞれに解説をつけて表にまとめていた。
「黒糸が農奴では無い者、地主・商人などの自由民の家の子か。赤い糸が官位官職を賜っていても皇帝に目通りは適わない家柄の子、紫が目通りが適う貴族や地方の有力者の家の子、銀糸が皇族か城持

ちの大貴族の子、金糸が皇帝自身の御子……ふうむ……では……」
「薬草取りのおばばに昔教えて貰った話によりますと、皇帝の血筋では普通の家より頻繁に忌み子が生まれたそうです」
「で、このズボンの濃い紫色の意味合いは、何なのだ？」
「自分の家より高貴な家の子を預かった場合に使う色とされています。預かり子の色、などと呼ぶ色ですね」
「セシリアの子供時分の服も、こんな色だったのか」
「はい。どの服もこの色でした」

ロベルトは難しい顔つきになって、マウリッツ・ノイマンの残した報告書を読み始めた。

「この報告書は蝋で封をした紙袋に入れられていたが、セシリアは全く読んでいないのか？」
「はい。先代様の御命令で亡き夫がまとめたものです。私が読んでよいとは思えませんでした」
「セシリアらしい、律儀な事だ。これによれば、セシリアの母上が皇帝の姉君という事になるようだぞ。セシリアと兄のイゴールを産んですぐに亡くなられたようだ。父上は公爵だな。チェルケズ公爵ダリオ・ミラディンか……既に故人のようだ」
「私の……母の名は記されておりましょうか？」
「ああ、これだ」

ロベルトが指差した系図に、亡き夫らしいかっちりした読みやすい字で女の名が記されている。

「アンヌ・テレーゼ・コルネリウスですか」
「コルネウスは皇帝の姓だな。皇帝の姫君が降嫁した場合は、結婚後も姓はそのままか。何々……歴代皇帝の次女はアンヌ・テレーゼの名をつけられているのか。ならば……アンの音で始まり、スで終

わると言うのだから……」
「さようですね。あれも、本来の名は……恐らく」
「アンヌ・テレーゼ・コルネリウスという事か。ふうむ……セシリアの双子の兄上は生存している可能性が高そうだが、行方はわからんよな」
「コルネリウスを名乗る人物は、誰が居るのでしょう？」
「ここに記された二十人だが……大方死亡が確認されてるはずだ。ただ、あれと同じ時期に出生したと思われる皇太子のリシャールだけが生死不明だったと記憶している」
「やはり、顔は似ているのでしょうか」
「そう考えるのが、自然だな。それにしても、セシリアとあれが従姉妹同士だったとはな」
「かなり歳の離れた従姉妹ですね」
「顔がどことなく似ているのも道理だ」

その後王と乳母はかなり長い時間、二人きりで話を続けた。

「まだ結論は出ていないが、当分相談した手筈でやっていく他あるまい」

その王の言葉に対して、乳母は深々と礼をして、王の居室を辞した。

侍従・3

「ネリー、母上は何を話しに行かれたのかな」
「さあ。亡くなられた旦那様のおまとめになった書きものなどをお持ちしたようです。何か御役目に関わる秘密のお話ではないでしょうか」
「秘密のお話……」
「はい。秘密ですから、私も何も存じ上げない訳でして。直接奥様にお尋ね頂くしか御座いませんよ」

ネリーは侍従の養母にあたるノイマン夫人が最も信頼するメイドだ。もともとは亡くなった実子の乳母であったらしい。その後、ネリーの夫は上官であるマウリッツと共に戦死したのだそうだ。ネリーの息子は無事に成人して、夫の生家の商売を継いだ。
養母が信頼するだけあって、ネリーも口が堅い。淹れてくれたコーヒーは薫り高く、王の御前でいただく物より美味いぐらいだったが、何も聞きだせないのは確実だった。

「それにしても、長いね」
「さようですね」

結局、養母が戻ったのはいつもの就寝時間を過ぎた頃だった。

「すっかり遅くなりました。陛下がおっしゃるには、入浴の介添えは無用だとのことですよ。明日の朝食は、いつも通りの時刻にとのことです」
「湯から上がられた後の飲み物の毒見は……」
「御自身で注がれて、当番の護衛役に一口飲ませてから、お飲みになるそうよ」

色街にも供をする三人の屈強な護衛たちは異民族の若者で、それぞれ裏通りや色街で虐待されていた所を子供時分にロベルトに保護され、その後武芸をおさめた忠義者ばかりだ。王としてのロベルトに忠義を尽くすと言うよりは、ロベルトだけが自分の主だと命がけで思い定めているような連中で、それだけに信頼もできるのだった。

「大君主国の連中の事も心配です」

「ああ、暗殺を専門に行うと言う者達ね。あの護衛は大君主国で生まれた者のようだから、そのあたりの気構えも十分ですよ。きっと。お前もすぐにお風呂にしなさい。私は食事前に済ませました。あまり遅いと湯を運ぶ者も大変です」

「はい」

自室に入浴できる設備が無いわけではないが、自分が女である事を承知している養母の住まいで入浴する事にしている。その方が安心できるからだ。王は清潔好きで、必ず毎日入浴なさるのだから、侍従の自分が不潔ではいけない。そう若い侍従は考えている。だが、確かに養母の言うように入浴のために湯を運ぶ者は大変なのだ。遅くなった事について、一言詫びておくべきだろう。

「それにしても、何なのかなあ」

夜遅くに湯を運んでくれた中年のメイド二人に、心づけをやり、後は自分で出来るからと言って下がらせた後、ハーブの香るたっぷりの湯につかりながら、つい独り言を言ってしまう。王は義母が人払いを要求した事を意外に思っていらしたようだ。養母が自分に聞かせたくない話とは、一体何なのか？

「お前に聞かせるのは、時期尚早だと判断したのです」

先ほどそんな事を養母がチラッと言ったから、自分にも関係した話だと思われる。確かに、自分は昔の記憶が無い。記憶が無いのは、記憶しきれないか記憶したくないか、何か理由が有るのだと医師に聞いた事が有る。記憶したくない何かだとすれば……忘れている方が幸せと言う事なのかもしれない。

敬愛する王と賢明な養母が下した判断に、異議を唱えるべきでは恐らくないのだが、仲間外れにされたと恨み言を言いたい気分になるのは、自分でもどうにもならない。そんな事を思ってベッドに入ったせいか、寝付きは良くなかった。

ベッドの中で何度目かの寝返りをした瞬間、王の部屋との間の秘密の扉が開いた。王の部屋の側からは書棚に見えるように作ってある特別な扉だ。在り処を承知しているのは王と自分だけのはずなので、侍従は驚き、愛用の剣を引き寄せた。だが、聞き慣れた足音がしたので、ほっとする。王の足音に違いない。

「寝たか？」

侍従は返事をせずにいた。とっさの判断だったが、その方が良いと言う気がしたのだ。

「どれどれ、久しぶりに可愛い寝顔を見てやろうか」

王は手にランプを持たれて、こちらへいらっしゃるではないか！

侍従は気が気では無かった。ともかく目をつぶり、寝息に聞こえるように呼吸を整えた。

「やっぱりこうして見ると、女の子だな。きれいな髪だ」

王は髪を撫でておいでだ。いつもなら考えられない事なので緊張する。入浴後、かなりの量のワインを飲まれたのだろうか、と侍従は思った。はっきりと酒のにおいが感じられたからだ。

「いけない事をしては困るので、悪い大人は部屋に戻るよ。おやすみ」

また王は秘密の扉を抜けて、自室に戻ったようだった。思わず侍従は脱力した。それにしても、驚くべき出来事だった。自分が女で

ある事を、王が御存知だった……その事実に衝撃を受けた。いつから？　だが、王はその事をなぜかおっしゃらない。なぜだろう？　侍従は戸惑った。そのくせ「可愛い」とか「きれいな髪」と言った言葉がうれしかった。「久しぶり」とおっしゃったからには先ほどが初めてという訳では無いのだ。その事も驚きだった。そして最後の言葉は、何をおっしゃりたいのだろう？　「いけない事」とか「悪い大人」とか……。

「ああ……」

若い侍従は不完全にではあったが、意味合いを理解できたような気がした。月の物が来る直前の頃の事だが、市中の愛人の邸に一度だけお供した事が有る。あの愛人が……そのような事を口にしていたのではなかっただろうか？

場所は下町のどこかで、壁が白い三階建ての建物だった。運河に近かった記憶が有る。二階のキンキラキンの壁紙に裸の男女が描かれた絵が掛けられ、かなり強い香水の匂いが立ち込めた部屋に通された。そこで、チョコレートとコーヒーを出されたと記憶している。

「あなたはまだ、お若いから。こちらの部屋にいらしてください。悪い大人のいけない悪戯は、まだ、早いでしょ、ね？　このチョコレートでも召し上がれ」

その愛人は淡いピンクの半透明の布を幾枚か重ねた、乳首が見えそうでギリギリ見えない際どい演出のドレスを着ていた。そんなドレスを見るのは生まれて初めてであったので、若い侍従は驚きのあまり、まともな受け答えが出来なかった。そんな様子を見て、愛人の女はクスクス笑った。出されたチョコレートには手を付けず、コーヒーを二口ほど飲んだが、まずかった。

「ここに有る本、よろしかったら御覧になる？」

クスクス笑いながら、そう女が言い置いていたので、手に取って見たら、あられもない男女の姿を描いた書物だった。小説の体裁だったり、絵本の様だったり色々だったが、内容は単純だった。いわゆる春本とか枕絵とか言う類の代物であったらしい。それがまあ、四、五十冊も有ったように記憶している。当時すでに真面目な医学書は読んでいたので、内容はおおむね理解できたが、一冊ざっと見れば十分だった。

「こんな本の何が面白いんだか」

サッパリ訳が分からないと言うのが、当時の正直な感想だった。だが……

「今なら、少しわかる様な気がする」

そうなのだ。男に髪を優しくなでられて、女がうっとりすると言う描写も有った。ああした本では最初の段階だったが。手をつないだり、見つめ合ったり……抱きしめあったり……キスをしたり……

「どこからが『いけない事』になるのかな」

そんな事を言えば、あの愛人あたりにクスクスと笑われるのは確実だ……と、若い侍従は思った。それにしても、大人のいけない悪戯を、陛下はあの女と楽しまれたのか……そう思うと、なぜか急に腹が立ってきた。あの女だけではない。他にも幾人もの女を相手になさったのだ。その事に思い至ると、急に悔しくなって来て、涙があふれ出した。少女は枕に顔を伏せ、声を押さえて、すすり泣いたのだった。

国王・3

「あれが最後の皇帝の娘であるならば、王妃に迎えてもおかしくない身分ではないか」
「そういう事にはなりますが、肝心の陛下のお気持ちは？」
「気持ち、か？」
「ええ。あれは一心に陛下をお慕いしています。ただ、親や兄弟を思う気持ちに近い様な気も致しますが」
「そのようだな。あれが思う程、自分が立派な王では無いと言う自覚はあるさ」
「王としては、今のままでも十分御立派だと思います」

やはり育ての親である乳母の言葉は痛い所を突いてくる。

「王としての手腕は、まずまずだが、私生活が褒められたものではない、という事か」
「はあ、まあ……そのあたりは御自身でもお判りでしょう。私は王としての陛下では無く、おひとりの男の方として、あの子をどうお考えか、どうなさりたいのか……差し支え御座いませんでしたら伺っておきたいのです。今はまだ、はっきりしたお考えはお持ちではないような気もいたしますが」
「そうだなあ。あれが大人になるのを傍で見ていたい。それ以上はろくに何も考えていない。ただ……あれが、なぜ記憶を失っているのか、その謎がとけていない以上、今の扱いをあまり変えない方が良いかも知れないとは思っているがな」

以前セシリアが「女である事に心底絶望するような辛い事を戦場で見聞きして、女の子としての自分を無意識にでしょうが放棄したのでは」という仮説を述べた事が有る。あの初潮の一件以来秘密を

共有してくれているロベルトが信頼を寄せている侍医も、そのセシリアの仮説に賛意を示した。失われた記憶も恐らくそのあたりの事情と絡んでいる、というのもセシリアと侍医の二人に共通した見解だ。

「内面的な成長に伴い、御自分で女に戻ろうとなさるまで、あまり無理はしない方が良いかもしれませんな」

その侍医の言葉が有ったので、余計にロベルトは侍従が少女である事を知らないふりをしてきたと言う経緯が有る。

「あの子が女の子に戻りたい素振りを見せましたら、少しずつ女らしい事を教える事に致しましょうか」

「セシリアにそこは任せるが……そのようなそぶりは、見えているか？」

「ええ。微かにですが。以前は全く興味を示さなかった女性の衣服に関して、自分から話をする事が時折ございます。ですが、女の姿は馬に乗る場合も不便だとか、剣を扱うにも弓や射撃を学ぶにしても、万事不便だとも申しておりました」

「射撃など、習っているのか」

「近衛の陣内に先ごろもうけられました射撃場に通って、学んでおります。腕前のほどは射撃の教官が褒めておりましたから、悪くは無いようです。どうやら先ごろ開発された小型の短筒を、陛下をお護りするのに使えないか考えているようですね」

「あれが女だと気が付いている人間は、どの程度いるだろうな」

「さあ……私には見当がつきません」

「射撃の教官にばれたのではないか……などと気になってな」

射撃の姿勢の指導をする際に、ある程度体に触れているだろう。その際に気づく可能性は高い気がする。それに……他の男が、あの侍従にわずかでも触れるのは、やはり嫌なのだ。あれだけ美しいのだから、教官が劣情を催すという危険も有りそうだ。そんな事も、つい思い浮かんでしまうロベルトであった。

「あの教官には三人の娘がおります。毎日賑やかで大変なのだと聞いた事がございます。そうですねえ、ああした年頃の少女を見慣れておりますから、あるいは気が付いたかもしれません。ですが陛下があれを男として遇しておられる事は十分教官も承知しておりますから、要らざる事は申しませんでしょう」

「そうか」

セシリアの言葉を聞いて、下種な心配をしすぎたのかも知れないと思い、いささか恥じたロベルトであった。

退出するセシリアに、侍従がロベルトの居室に戻るには及ばない事を伝えさせた。侍従自身の入浴は乳母の住まう部屋の方で行うはずだ。

「そうでも無ければ、覗きでもしでかしそうだ」

ロベルトは浴槽につかりながら、そんな独り言をつぶやいて苦笑した。侍従には教えていないが、あの侍従が現在使っている部屋は、かつて王の愛人の秘密の居室として使われた時代が有り、入浴をしている様子を覗き見る事が出来る秘密ののぞき穴が儲けられているのだ。そんなものを作らせたのは祖父か、曾祖父かどちらからしいのだが。

風呂から出ると、冷やしたワインを飲むことにしたが、一番若く腕が立つ護衛が「毒見をお忘れにならんようにと、言いつかっております」などと言った。色街での飲み食いの際は、女たちにさせるが、今のような場合は護衛にさせる事になる。そのように常々侍従が護衛たちに命じているようだ。

「お前が先に飲め。一杯注いでやっても良いのだが、眠気を誘うとまずいからな、半分だ」

「はっ」

銀製のゴブレットに注いだ、冷えた白ワインを護衛は飲み干すと、その後どうすべきか戸惑ったようだ。

「そのまま渡してくれ」
飲み口を拭うとか、飲み口を外して回すとか、宮中の作法は面倒な事だ。ロベルトは構わずそのゴブレットとワインの瓶を持って、暖炉脇の寝椅子に陣取った。連日これほどの警備を怠らないのは大君主国の暗殺部隊を恐れての事だ。かの国は攻め入ろうとする国の、元首なり宰相なりに毒を盛る場合が有るらしい。その場合は国家の中枢にまで協力者が入り込む必要が有るので、簡単ではないだろう。もっと大まかに目標を絞り込まないで、相手方の宮殿なり城なりの飲料水や酒にたっぷり毒を仕込むなどと言う手口も過去には有ったようだ。こちらのやり方なら、使用人にたっぷり金品を掴ませておけば、不可能では無いだろう。

一番確実に危険なのは、寝所に腕利きの暗殺者が忍び込んだ場合だ。古い城や宮殿には図面に載っていない隙間やら穴やらが開いている場合が多い。そうした場所に暗殺者が潜り込むと厄介だ。ロベルトは自身の居室を中心に十分調査させ、無用な抜け穴や隙間を塞がせた。その調査のおかげで、色々と面白い仕掛けも再発見したのだ。風呂ののぞき穴もそうした仕掛けの一つだ。
「風呂かあ……」
どの王がどんな女の入浴の様子を覗いて楽しんだのか、今では皆目わからない。だが、確かに意中の女の入浴の様子を覗くのは楽しそうだ。あれの白い肌が湯で温まると……などと、つい具体的な事が思い浮かんでしまう。そんな自分を何とまあ下種な奴だと思うが、それが掛け値なしの自分なのだとロベルトは思っている。
だが、あの侍従は……アンドレアスは……いや、アンヌ・テレーゼと呼ぶべきか、ともかくあの娘は自分を信じきっている。幼い子供が父を見る様な、妹が兄を見る様な、そんな雰囲気が強いとは思うが。
どうせ何れは正妻である妃を迎えなくてはいけないのだ。ならば、あの子で良いではないかと思う一方で、急いては事を仕損じるだろ

うとも思う。
一人でワインの一本を空けてしまうと、後は寝るばかりだ。
護衛がベッドの下にも潜り込んで、危険なものが無い事を確認してから寝室に引き取った。足元の書棚は、実は隠し扉で、隣のアンドレアス、いや、アンヌ・テレーゼの部屋に直接通じている。

「ちょっと寝顔でも見てくるか」

ロベルトはごく、軽い気持ちで隠し扉から隣室に入った。実は以前に二度ばかり、寝顔を見に行った事はあるのだ。その際はもっとおっかなびっくりだったが。酒の勢いを借りた所為か、今回はためらいなくランプを手に隣室に入った。その方がはっきり寝顔を見る事が出来るからだ。だが、その行動がどのような波乱を招くのかは、全く予想していなかったロベルトであった。

ノイマン夫人・3

アンドレアスの様子がおかしいとノイマン夫人は感じた。
どうおかしいとは、はっきり言えないが、何やら心に鬱屈するものが有るように見えるのだ。先日の人払いが、心に引っ掛かっているのだろうとは察しはつくが、それだけでもないのかもしれない。王と自分自身のこれからの関係と行った事に、思いが至るようになった所為だろうかとも思う。
警備上の理由から、王は夜の外出を止められた。そして、連日アンドレアスと夕食を召し上がるのだが、その後が問題なのかもしれない。早めの夕食を済ませて、入浴のためにやってきた養い子と、食後の茶を共に飲みながら、そのように感じたのだ。

「母上、陛下がお出かけにならないのは確かに安心ですが……」

言いたい事の見当は付く。王の数多くの愛人が入れ代わり立ち代わり、日替わりで王宮にやってきて、通常の国王の寝室とは異なる部屋、かつては退位した王の隠居所であったり、特別に寵愛する愛人の部屋であったりした部屋だが、その部屋で愛人とベッドを共になさるのだ。恐らくその事が心にかかるのだろう。

「愛人方の数を減らそうとなさっているようよ。お子を産んでない方には、原則、お暇を出すようね」
「そうなのですか？」
「ええ。いずれは正式な結婚をなさらなければいけないのだし、身辺整理をなさる必要を感じておいでなのでしょう」
「一番、御寵愛の深い方はどなたなのでしょう？」
「さあ。御子を生んだ三人の方は平等に扱っておいでのようね」

三人の愛人は全員貴族では無い。だが、それぞれ医師・軍人・下級官吏といった比較的教育が有る家庭の娘であって、標準的なこの王国の女性よりはかなり教養が有る者ばかりだ。父親を亡くし、幼い兄弟を抱え経済的に困窮していたと言うのも三人共に共通している。つまりは没落した中流階級の娘と言う訳だ。一人は娼婦になり、一人は女優になった。もう一人はどこかの飲み屋で働いていたらしい。三人とも大貴族の実母として、それほど不体裁では無いのは、国王が意識してそのような者達を選んだのだろうとノイマン夫人は考えている。それぞれが邸と年金を賜り、申し合せたように子を二人づつ生んでいる。六人の子供たちは六歳の王子を頭に、一番下の姫君が四歳のはずだ。どの子も七歳になったら、王宮に引き取る予定だと聞いている。

「以前、陛下のお供をしてお会いした事の有るイローナ嬢は、どうなさったのでしょう？」

「ああ、その方は、陛下とは一年限りのお付き合いだったはずよ。女優の方よね。陛下の後に後援者になって下さった親子ほど年の離れた伯爵の後妻に、つい最近なられたようよ」

「そうなのですか」

「そうなのよ。貧しい家の娘さんが伯爵夫人ですから、まあ、出世なのでしょう。ああした世界では、陛下の愛人であったことが一種の箔付になるようね」

「はああ……大人の世界の話は、難しいですね」

「私の亡くなった夫などは堅物で、そうした点は気楽だったけれど……王である方には色々鬱屈なさる部分も有るのでしょう。ああした女性が今の陛下には……恐らく必要なのね」

「はあ……実は……」

ノイマン夫人は陛下が侍従の寝室に忍んできた一件を聞いて、驚いた。そして困った事にならなければ良いがと心配にもなったが、

そのような様子はこのアンドレアスには見せない方が良いとも考えた。国王陛下は大人でいらっしゃるが、この子は若い。変に身構えたり、ぎくしゃくしたりした関係になるのは互いに取ってよろしくない……そんな風に感じたのだ。

「……ずいぶん以前から、陛下は私が男では無いと御存知だったのでしょうか」

「実は、初めての月の物が有った時……」

いまさら隠す必要も無い事である様な気がしたので、あの日、出血に驚いて自分に事態を知らせてきたのはロベルト王自身であった事を夫人が告げると、若い侍従は衝撃を受けたようだった。

「そんなに……前からですか」

「ええ」

「陛下は、私を将来どうなさるおつもりなのでしょう？」

「特に決めてはおられないと思うの。お前を引き取った行きがかり上、責任を感じておいでは有るようだけど……女に戻るか、アンドレアス・ノイマンとして暮らしていくのかは、お前自身に任せるべきだと考えておられるようね」

「でしたら……しばらくは、今の状態でも構わないのでしょうか？」

「一度、陛下に御相談する方が良いかしら？　女として暮らしたくなったの？」

「……いえ。出来る事なら、むしろ今の侍従としての仕事を続けていきたいです。ですが……」

「なあに？」

「あと数年で……嫌でも女であるとわかる様な体になってしまうでしょうか」

「その点も、考えておくべきでしょうね」

「はあ……でしたら、女として見苦しくない振る舞いも、学ぶべき

でしょうか？」
「その方が、良いのでは無いかと、私は思いますよ」
「そうですか。……母上がそうおっしゃるなら、少しづつでも、教えて頂こうかな」
「では、月ごとに頂くお休みの折に、女の服を着て過ごしてみる事から、初めてみましょうか。ね？　普段は御役目も有るし、武芸の鍛錬や学問も有るし。だって、ほら、大君主国の言葉や歴史や法律の勉強も有るのでしょう？」
「はい。どうにかして、大君主国ときちんとした形で、外交関係を作り上げたいと陛下はお考えのようです」
「ならば男ではない事が、お役に立つかも知れないわね」
「そうですか？」
「だって、あちらの後宮に暮らす女性たちは、男に顔を晒せないとか、言葉を交わせないとか言うでしょう。でも、女か宦官ならば面会できるのよね」
「そうですね。あちらの後宮にはこちらの大陸生まれの女性が沢山居て、中にはレイリアや元の帝国出身という人も多いと聞きます。大君主の生母である女性や、子を産んだ女性達に働きかける事は出来そうですね」
「それにしても、行方不明だと言う大君主の姫君は、どのような方なの？」
「それが、つい最近判明したのですが、まだ、赤子であるようです」
「まあ……それは、おいたわしい。その御子の母上も嘆いておいでしょうね。それにしても、赤子をさらうとは、何とも卑怯で嫌なやり方ねえ。でも、なぜ、大君主国側はこちらの方にその姫がいると見ているのかしら？」
「こちらに向かう船に乗せた……と白状した者がいたようです」
　この調子で大君主国がらみの話をすれば、多少は若い侍従の気がまぎれるのではないかと、ノイマン夫人は思った。

それにしても……ここからは見えないが、侍従自身が使っている部屋からは、どうやら王と愛人が夜を過ごす部屋の灯りが見て取れるらしい。以前よりも王を異性として強く意識しているらしいこの少女には、なかなかに辛いのだろう。灯りがついていたらついていたで気になるし、それが急に消えたとなったら、これまた気になるだろう。そのあたりの事も、一言申し上げるべきなのだろうかとノイマン夫人は考えてしまう。

王が愛人と過ごすのは夕食以降、朝食前の時間までのはずで、それまで王宮内は静かなはずなのだが……

「母上、何でしょう？　叫び声が聞こえます」

いきなり飛び出そうとする侍従を押しとどめ、セシリアはかなり腕の立つノイマン家の護衛二人を急ぎ呼んで、供をさせた。何やら嫌な予感がして、そのようにさせたのだったが……後から思えば、正しい判断であったようだ。

暗闘・1

侍従は二人の供を連れ王が居るはずの別棟に向かって走った。すると、侍従の耳元を、何かがかすめ飛んだ。そして急に一人の曲者が切り付けてきた。二人の供が切り結んだ様子からすると、こちらの大陸の剣ではなさそうだ。

「観念しろ」と侍従が言うと、急に体を翻して逃げ出した。侍従は曲者が落とした小さな剣をとっさに拾って投げつけた。命中したようで、暗がりから呻き声が上がった。

「追え！」

侍従がそう命じると、二人は曲者を追った。侍従は王のもとに急いだ。

「陛下、御無事ですか」

「ああ、アンドレアスか。大事無い。だが、ハムザがやられた。命は助かったが」

ハムザというのは蜂蜜色の肌に赤褐色の髪と目をした一番若く、一番腕の立つ護衛だ。どうやら大君主国の者に吹き矢で襲撃されたようだという。毒を仕込んだ吹き矢の話は聞いた事は有るが、若い侍従は吹き矢の現物を見た事が無かった。物陰に隠れて音も立てず密かに襲撃するのに向いているらしい。ハムザは利き腕の手の甲に吹き矢を二本食らったらしい。手がはれ上がり、動かせないようだ。次第に熱も出てきたと言う。それでも、かねてから王と侍従と護衛たちは毒物に体を慣らす様にしていたため、解毒剤を飲んで安静にすれば命に別状はないらしい。

「この血痕は曲者のものですね」

ハムザがとっさに利き腕では無い方の手で投げつけたナイフが、相手の体のどこかに刺さったようで、細い血痕が点々と続いているのを侍従が見つけた。
「たどってみましょう」
たどるうちに、犯人に行きあたる事も可能かもしれない。そう侍従は思ったが、王は良い顔をしない。
「危険だ」
「ですが、すぐにたどりませんと、何かの加減で血の跡が無くなります」
「ならば……行っても良いが……無理はならん。ファリドとキアーに付いて行け。こちらには近衛がいるから大丈夫だ」
「はい、ありがとうございます」

ロベルトの護衛のファリドとキアーは磨き抜かれた黒檀のような色合いの肌をした大男だが、身のこなしが軽やかで、高い塀の上でもほとんど音を立てずに走ると言う特技が有る。西大陸の武器以外に、東方の武器や武芸にも通じている。縄抜けや武器を持たない格闘技の名手でもあって、若い侍従から見ると不思議の国の超人のように思われる存在だ。二人とも侍従には普段から優しく親切だが、その理由がどうやら侍従が「小さな女の子だから」という事のようで、女である事を見抜かれないように用心しているつもりの侍従としては、複雑だ。

三人で血痕をたどると、昼間なら洗濯女たちが賑やかに仕事をしている洗い場の井戸で途切れていた。どうやら曲者は血を洗い流し、手当をしたようだ。
「水滴は続いている」
ファリドの言葉に、今度は水滴を追うと、不浄門の側の大木で途切れた。

「ふざけた事をする」
「置手紙ということか」
一枚の紙が大木の幹にナイフで留められている。手紙は明らかにこの国の言葉では無い。大君主国の共通語のようだ。
「王はお読みになれるだろう。シャヒーンからお渡ししろ」
内容はわからないが「ふざけた」手紙らしい。

「木に登って、塀を越え、外に出たな」
キアーの言う通りだろう。すぐ外は都で一番の市場の大通りで、もう既にこの時間から翌朝の取引のための物資の搬入が始まっているはずだ。
「足跡は既に消えているだろう。だが、方法が無いわけでは無い」
ファリドが言うと、キアーが頷いてこういった。
「ファリドと二人で、夜明けまで奴を追ってみる。シャヒーンは王のもとに戻れ」

シャヒーンとは東方でハヤブサを意味する言葉であるらしい。若い侍従が「小さくて素早い」あるいは「狙いをつけたらまっしぐら」なので二人、いや、負傷したハムザも含め三人が、そのように呼ぶのだ。どうやら馬などにも良くつけられる名前らしくて、侍従としては不本意な呼び名だが、近頃は主であるロベルト自身も時折「シャヒーン」と呼ぶので、不承不承受け入れている。

侍従は自分がお荷物扱いされたと感じた。行動を共にしたいと主張したが、二人は受け入れなかった。
王国の正式な官職についている侍従と、ロベルト王の私的な護衛の二人とは立場が異なる。身分としては侍従が上と見なされるかもしれないが、二人にとっての主は王だけであって、他の人間の言葉に従う義理も義務も無い。ましてや足手まといの「小さな女の子」を連れ歩く義理は無い。そう思っているのだろうと、侍従は感じた。

どうやらロベルトから何も聞いて居なくても、初めて会った時から「シャヒーンが女だとわかっていた」と言う。事情を知って、若い侍従はますます複雑な気分になった。

「ダメだ。シャヒーンは王のもとで為すべき事を為せ。いいな」

「太陽が昇ったら、王宮に戻ると、王にはお伝えしろ。いいな」

二人はあっという間に大木を上ると、軽々と高い塀を越えてしまった。置いてきぼりを食った侍従は、言われた様に王の居室に戻るほかなかった。

「良い良い、案ずるな。近衛の猛者が守りを固めたからな。今のうちにお前は急ぎ邸に戻れ。あまり出歩くなよ。また落ち着いたら、呼んでやろう」

ロベルトはそのような事を言って愛人を抱きしめ、なだめていた。愛人の方はロベルトにこれ見よがしにしな垂れかかっているように、若い侍従には見えた。不愉快であった。ともかくも愛人を馬車に乗せ邸に送りだした後、侍従は問題の手紙をロベルトに渡した。

「置手紙か……ふざけた話だ」

どうやら王によれば、幼い姫が行方不明になったのは、王であるロベルトの自国民の監督が不行き届きだからだと非難する内容らしい。自国の犯罪者の全てを監督出来ている支配者など、存在するとも思えない。とんだ言いがかりだと侍従は思う。それに……決めつけも甚だしい。侍従は憤慨した。

「誘拐犯がセレイア王国の者と決まった訳でも御座いませんでしょうに」

「大君主国では、大君主が黒と言えば真っ白いものでも黒なのだ」

そうこうするうち、ノイマン家の二人が戻ってきた。どうやらこちらも曲者を市場付近で見失ったらしい。

「それにしても王宮の奥に入り込んで狼藉を働いたのは、この置手紙を置く為だったのでしょうか？　庭木に矢文の二つ三つも射かければ十分でしょうに」

侍従はどうも今回の騒ぎは色々と変だと感じる。

「どうやら……本来は私の寝室に置手紙を置くように命じられたのだろう。だらしなく女と寝こけている所に、警告の文を置く、そういう予定だったのだろうよ。馬鹿にした話だ。こちらの警護がそれなりに頑張ったおかげで、手紙の置き場所が予定外に、不浄門近くの庭木になってしまったと言う事なのだと思う」

「なるほど、お目を覚ましたらそこに大君主からの警告というかこの手紙が有ったと言う方が、確かに衝撃的ですけど……そのような事、本当に大君主が命じたのでしょうか？」

「大君主が如何なる人物なのか、わかっていないからなあ。本当に大君主が命じたとしたら、あまり利口な人物ではないという事になる。だが、大君主の国内の反対勢力が何か企んでいるなら、あながち間違ったやり方とも言えない」

「幼い姫君が行方不明なのは、本当なのですよね」

「ああ。その点は掛け値なしに真実らしい」

いずれにしても、レイリア王であるロベルトは、人さらいの仲間と見なされたにせよ、国内での権力闘争の一種の噛ませ犬と見なされたにせよ、ロベルト自身が述べたように「ロクな扱いをされていない訳で、実に呆れたひどい話」なのだ。

「どうも……市場のあたりに何か有るのではないかな？」
「さようですね。徹底的に調べるべきでしょう」

若い侍従も国王もその夜は色々有りすぎて、寝疲れない気分だった。自然、いつもの居室に戻り、侍従が茶の一つも淹れてファリドとキアーの帰還を待つ……という事になった。毒にやられたハムザは穏やかな寝息を立てて寝始めているのを、先ほど確認できたので、ひとまず安心だ。

愛人が帰ってしまい、更に非常事態ではあるので、当分は愛人を王宮に呼ばない事にしたと言うロベルトの言葉を、若い侍従はうれしいと思って聞いた。そしてその事に侍従自身驚いてしまったのであった。

暗闘・2

王の表情は、直前まで愛人の相手をしていたなどとは全く思えない。キリリと引き締まっている。戦闘態勢に入った戦士、という感じだ。久しぶりに政務を休み、のんびり過ごしていたのが台無しなわけだが、それでも決して不機嫌な顔をしない。「目下の者に八つ当たりをしてはなりません」とセシリアに躾けられたのだと、以前苦笑半分に侍従に語った事が有るが、その教えをきちんと守るのは王自身の努力と克己心の賜物なのは間違いない。やはり御立派な方だと、あらためて侍従は思うのだ。

やがて王の命令で、眠気覚ましのコーヒーが一兵卒に至るまで、その場の全員に振る舞われた。そうこうする内にファリドとキアーの二人が戻ってきた。何か見つけたらしい。

「市場のすぐそばで、怪しい家を見つけました」

「近隣に住むなじみの商人らに見張りを依頼しております」

「その家は良く存じております飲み屋のオヤジの持家なのですが、今年に入ってから元の帝国で貴族だったと言う男が一年契約で借りているそうです」

聞けば大君主国風の身なりの者も時折出入りするらしい。

「……なるほどな。なあ、ファリド、キアー、物は相談だが……」

王のその言葉以降は周りに控えた兵士の手前なのかどうなのかは不明だが、大君主国の言葉に会話が急に切り替わった。ところどころ単語を拾う程度しか出来ない侍従には、三人が何を話し、なぜ笑っているのか、皆目見当がつかなかった。

時折、クスカンチという言葉が耳に入る。そもそもセレイアの言葉で会話をしている時でさえ、ロベルト王と三人の異民族の護衛た

ちの間には、特別に親密な深い関係が有り、その中に侍従は入ってはいけないものを感じてきたのだ。それでも一番若いハムザは素直に侍従の言葉に従ってくれるが、王と歳が近いファリドとキアーには先ほどのように露骨に「小さな子」扱いされてしまう事も珍しくない。

三人とも子供時分にロベルトに保護され、その後武芸をおさめたのは共通しているが、ハムザは、ずっとセレイア国内の大君主国の亡命者の居留地で育ったのに対して、ファリドとキアーは、それぞれ傭兵として幾つかの国で働いた経験が有る。亡命した武芸の達人の元貴族に付いて修行をしたハムザの武芸が「良くも悪くも行儀が良い」のに対して、ファリドとキアーの武芸には「血みどろの戦場をはいずり回って生き延びた」凄味が有るのだ。縄抜けなどは「奴隷として売り飛ばされ、見世物小屋でこき使われて」学んだらしい。

そんな事情も有って剣や馬術ではハムザが一番すぐれているが、諜報活動やら情報分析やらといった人生経験が物を言う事柄になると、腕っ節の強いハムザも「まだまだ」なのである。

「ハムザは女をろくに知らんからなあ」

「まだまだ青いからな」

そんな事を言う二人の「おっさん」には適わないとハムザ自身も認めていて、特に相手が手段を選ばぬ卑怯な相手となると、ファリドやキアーの意見に素直に従う。

会話の内容が理解できないせいもあって、侍従はコーヒーの給仕に集中していた。だから御前を辞する直前に、ロベルト王が軽く肩を叩いて侍従に向って言った言葉が、きちんと理解できなかった。

「……という訳だからな、今日は一日給仕の時間も気にせずのんび

り休め。明日から特訓だ。おやすみ」

聞き返そうにも、すでに王はあっという間に寝台に潜り込んでしまったので、正直な話、事態の詳細が掴めなかった。だが、仮眠と言う程度の短い睡眠を取ってから、寝ぼけ眼で朝昼兼用の食事をとっていたら、改めて王に呼ばれた。

「起きたのなら、特訓開始だ。ちょうどケマル師匠も来たのでな」

ケマル師匠と言うのは大君主国から亡命してきた学者で、ロベルトに大君主国の言語や歴史・政治事情などについて教えている。侍従は全く知らなかったが、東の大陸では高名な大学者なのだと三人の護衛は言っていた。敬意のこもった口ぶりから、相当な人物であるようだとは察しがついたが、侍従は一度も話をしたことが無かった。何しろ王との会話は全て大君主国の言葉であったので、侍従には難しすぎたのだ。だが、今日の王は西大陸の標準語で、老学者に語りかけている。

「正直な話、このクスカンチときたら大君主国の言葉は単語をようやく五百ほど覚えた程度で、まるで使い物になりません。武芸は師匠も御存知の連中に任せる事にして、言葉の方は師匠のお力も借りて、大急ぎで使い物になる程度に鍛え上げたいのです」

侍従も正式な弟子としての挨拶をケマル師匠にして、まずは叩き込むべき単語を読み上げるように命じられた。その後、師匠が正しい発音で読み上げた言葉を書き取り、スペルのチェックを受けた。

その間、王と師匠がかわす会話は大君主国の言葉だ。ケマル師匠は真っ白い長いひげを蓄えた白髪の温厚そうな老人だ。王の言葉に時おり笑い、言葉を返す。それを聞いた王がまた笑うと言う具合で、侍従にも理解できる言葉に切り替わるまでの時間は大層長く感じら

れた。

「クスカンチとは、少々お気の毒な。ですが、王がそうやって御自身で復習まで見ておやりになるのでしたら、きっと上達は早いですぞ」

老師匠の西大陸の標準語は全く訛りが無かった。

「色々本人の自覚が乏しいので、教えていくしかない訳でして。ですが、その宦官長との繋ぎは、確実につくでしょうか？」

「あまり関わりたくないのですが……」

「すみません」

「あ、いえ、王のお役に立つならそのぐらい、どうという事もございませんが……あれがセレイアに来る用事と言うのが奴隷の仕入れですからなあ。釈然とはしません」

「宦官長は師匠の……」

「乳母子です。宦官長の実の妹が、今の妻です。最初の妻はあちらで病死いたしました。その最初の妻が残した息子を育ててくれたのが今の妻でした。まあ、あちらではその、私も貴族の端くれでしたから身分の隔ても有って、今の妻には苦労を掛けました」

「その伝手を使えば、生まれ故郷に戻られる事も容易いでしょうに」

「確かに、広い砂漠や巨大な河、ナツメヤシの実りは懐かしく思いますが……自分の言いたい事も言えない国は、やはり窮屈です。奴隷もおりますし、身分差別もひどいですからなあ。私はもう、自由なセレイアの気風に馴染んでしまいましたから、今さら無理でしょう。それにこうして王の御恩顧を賜るようにもなりましたし、住み慣れれば、こちらは良い国ですから。私は妻ともどもこのセレイアに骨をうずめます」

それからの会話はずっとセレイアの標準言語でもある西大陸の共通語で続けられた。

「このクスカンチを、宦官長はどう見るでしょうね」
「さよう。今のままでも十分あちらの御寵姫方との面談に支障は無いと思いますが、通訳を介さずに交渉できますと、やはり安心ですな」

侍従はずっと単語の書き取りをしていたのだが、どうやら「クスカンチ」が自分を指しているのだとようやく気が付いたのだった。そして……大君主国の宦官長と近く面談するだろう、という事は理解できたのだった。

暗闘・3

この所、ファリドとキアーはロベルトの居室にやってくることが多い。毒の後遺症でまだ片手が上手く動かないハムザは、療養中だ。

「この剣の鞘だが……大君主国のものではないよな」

ロベルトは先日侍従が曲者と争った際に拾った小型の剣の鞘を、穴のあくほど見つめていた。

「さようですな。これはクスカンチ殿が王宮内の廊下で拾われた物ですな？」

「ああ、そうだ。これは元の帝国で作ったものかな」

「元の帝国で兵卒に支給されるものでしょう。見覚えが有ります」

傭兵暮らしも結構長かったらしいファリドが、はっきり言い切った。

「ならば、曲者は帝国の兵士か？　それにしては暗がりで振るった太刀の感じが、西大陸のものでは無く、大君主国式の大型曲刀だったようだと言う証言が有るのだが」

「元の帝国で、大君主国式の曲刀を使う部隊が一つだけ有りました。曲者はその部隊に所属していた者だったのでは？」

「ああ、通称宦官部隊か」

ロベルトは納得が行ったようだ。

帝国出身者で、大君主国に少年奴隷として送り出され宦官となり戦闘奴隷として仕込まれた者達が、改めて生まれ故郷の軍隊に貸し出された部隊だ。宦官になった者たちが旧帝国の農奴の息子たちであったのに対して、旧帝国軍の将校たちは貴族か皇族なので折り合いが良くなかったが、戦闘能力は高い事で知られていた。帝国軍は弱い事で有名であったので、余計になじめなかったのだろう。他の部隊と共同作戦を取る事は無く、大抵は一部隊で皇帝の身辺警護に当たっていた。

「宦官部隊の兵士なら西大陸の言葉の読み書きは出来ず、大君主国の文書の読み書きもあまり程度は高くないでしょうなあ」
キアーはどうやら先日の、置手紙の筆跡などについて考え込んでいたらしい。
「確かに……あの手紙の粗末さは、ちょうど見合っているよなあ」
ファリドもキアーの言葉に賛成のようだ。

「さて、そろそろ言葉を切り替えるか」
「まだ、クスカンチ殿が姿を見せませんが」
「書き取りの宿題を終えるまで、こちらに来るなと言ってある」
「それにしても、クスカンチ殿とは、ちと気の毒な言い方であったかもしれませんな」
最初に言い出したファリドが苦笑する。クスカンチとは「焼き餅焼き」という程の意味合いだ。
「だが事実だ」
「昨夜おいでになった女性も、あの光る眼が怖いとおっしゃいましたか」
キアーの言葉に、ロベルトは苦笑しながら頷いた。
「ああ。他にも六人ばかり、あの者の視線が突き刺さるようだとか、言っていた。皆、私の寵童と勘違いしてくれたようだがな。私にそんな趣味はまるで無いのだが、勝手に思わせておいたよ。事情を説明をするわけにも行かないからな」
ロベルトは苦笑しているが、誤解されても大して気にしていないらしい。
そこへ、市場の側の家を見張らせていた者達からの繋ぎが有ったようだ。
「どうやら帝国の残党どもが何か企んでいるようです」
市場の商人の息子らしい若者は、慣れない王宮に全身固くなっている。
「よし。兵たちを連れて行け」

ちょうどファリドとキアーが礼をして出て行ったのと入れ違いに、宿題を終えた侍従がやってきた。

「よしよし、真面目に頑張ったな。共に食事をしよう」

王は自分と同じ食器を使わせて、互いに食べ物を少し交換して毒見をした事にさせた。

「このように略式では……」

「気にするな。それより大君主国の言葉をどの程度覚えたかな？目につく物を言って見よ」

そう命じて、食卓に乗った食材や食器類を大君主国の言葉でどのように呼ぶか、確かめさせていた。後は、スープが冷めるとか、ワインを注げとか、肉の焼き加減がどうだとか、果物はどれが好きだとか、ごく簡単な内容の会話を交わした。

「クスカンチ、何？」

侍従は大君主国の言葉だと、そうしたたどたどしい言い方になる。敬語も使えないわけである。

「私を訪ねて来た女たちの何人かが『あの侍従の方が、すごいにらみ方をなさった』とか『目が怖いです』とか言うのだ。その話をすると、ファリドとキアーもお前の目つきが険しすぎると感じたようでな、お前が何をすると言う訳では無いにせよ、間違いなく焼き餅を焼いているのだろうと言う話になったのさ。ファリドの産まれた辺りでは嫉妬深い者を『クスカンチ』と呼ぶそうな。何やら音の加減が面白いから、お前の事をこっそり呼ぶときには私も『クスカンチ』と呼ぶ事にした。お前の人を睨む鋭い目つきはシャヒーンの方が合っているような気もするがな」

ハヤブサを意味する「シャヒーン」は分かるのだが、わざとロベルトが長々と大君主国の言葉で話したので、侍従にはほとんど何もわからなかった。ただ、何やら自分の目つきに関係が有るらしいと言う見当がついたばかりだ。

「意味は、わかったか？」
「目、どうした？」
「おお、よしよし。目に関係が有ることは、わかったのか。他には何かわかったか？」
「無理。わからない」
「無理ではない。頑張れ」
「王、賢い。私、馬鹿、難しい」

ロベルトは手を伸ばし、幼い子供にするようにワシワシと言う感じで頭を撫でた。そして尚も大君主国の言葉で話を続ける。

「私は三人の護衛たちと意識して大君主国の言葉で会話もしていたし、師匠の教えも受けている。子供時分から独学もしていたし、こう見えて学習歴も長い。お前はつい最近始めた割に、良く頑張っているさ。だがな、もっと頑張ってもらわねば。いずれ大君主国の奥向きに使者として、お前に行ってもらう必要があるだろう。何しろ女か宦官でなければ、宮殿の奥には入れないようだからな」
「大君主国、行く？　私？」
「今じゃないが、いずれな……いや、案外早いかもな。ならば、一層頑張って貰わねば」
「が、がんばる！」
「えらいぞ」

侍従が気が付くと、食事は終わっており、そこからロベルトは言

葉を切り替えた。

「昨夜の曲者は、大君主とは直接は関係無いのだろうと思われる。むしろ、滅んだ帝国が絡んでいるのだろうが、大君主国と我が国の関係が良い状態に無いのは確かだ。行方不明の赤子が見つかるかどうかはわからんが、見つからなくても、一度はお前が使者として話をしておくべきだろう」

「帝国の残党は、何を画策しているのでしょう？」

「東の大君主国と、西の我が国が正面衝突して、元の帝国領に対する締めつけが緩めば、国を再興出来るかもしれない、ぐらいの事は考えそうだ」

「ということは、神聖帝国の元の皇帝の血筋の者でしょうか？」

「そうなるかもしれんな」

それから王が急に黙り、じっと自分の顔を見詰めはじめたので、侍従は何やら急に恥ずかしくなってきた。

「何か……顔についておりますか？」

「いや、お前にであった最初のころの事を思い返してな。ようも無事にここまで大きくなったものだ」

若い侍従は、王が嘘を言っているとは思わなかったものの、何か絶対に隠しごとをなさっている……そんな風に思われてならなかった。

「なあ……」

「はい？」

「私がなぜ、女たちを王宮に呼ぶのを止めたか、理由を存じているか？」

「緊急事態で、安全の確保がいささか難しい状況だからでしょうか？」

「……と、確かに言いはしたが、それは違うぞ」

「そうなのですか？」
「ああ」
王はまた、侍従の頭に手を置いてくしゃくしゃとかきまぜる様な感じで撫で、それからちょっと意地が悪い子供のような表情になったかと思うと、こう行った。
「一番の理由はな、お前がクスカンチだからさ」
「ですから……クスカンチとはどのような意味合いの言葉ですか？」
「そのぐらい、考えろ」
王は余計に髪をくしゃくしゃにした。それから、こんな妙な事を言うのだった。
「すっかり髪をくしゃくしゃにしたなあ。とかしてやるから、さあ、ブラシを持っておいで」
「それは、一体どの様なお考えで？」
「私がくしゃくしゃにしたから、詫びだよ、詫び」
「そうなのですか？」
「それも有るが、お前の髪をもっと触っていたいのだ」
その言葉どおりに、ロベルトは髪をきちんととかした。それだけでは無い、入浴を終えた後、以前より伸びた侍従の髪を、今度は器用な手つきで緩やかに編み込んでくれたのだった。いかにも女の髪に馴染んでいると言う様子が、侍従は少し嫌ではあったが……
「これで髪に花でも飾れば、すっかり年頃の女の子だな」
ロベルトの顔はどこか満足そうで、その顔を見た侍従はひどくうれしく感じたのだった。仕上がった髪を見せられた手鏡には、確かにロベルトの言うように少女が一人、どこか満足げな表情で写っていたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2197ba/

大きな秘密、小さな秘密

2012年1月11日01時48分発行